

ハ數多ノ切開ヲ施シ主シテ深在セル筋膜下性、腱周圍性、骨膜性或ハ關節性膿瘍ヲ搜索スベシ而シテ注意シテ

排膿管ヲ押入シ手ヲ適當ノ副木或ハ三角帶上ニ安臍シ高

度ノ蜂窩織炎ニハ膊ヲ鉛直ニ高舉スベシ爾後經過中ハ蓄

膿若クハ流注膿瘍ナキヤ否ヤニ注意スベシ重症ナル腐敗

性炎アル時ハ生命ヲ危フスルヲ有ル又以テ手及上肢ノ切

斷ヲ要スルアリ又壞疽セル指節ハフオノ、エスマルヒ

氏絞縊法及依的兒噴霧ノ下ニ於テ離斷スベク又タ壞疽セ

ル組織ハ何タルヲ不問剪除スペシ

切開後ノ處置ハ「ブロー」氏液ノ罨法ヲ以テ最モ安全ナル

防腐消炎法ト信ズ石炭酸ヲ用ヒテ壞疽ノ失敗ヲナス勿レ

通常該罨法ハ一日一二回交換スルヲ以テ足レリトス

其他化膿症ニ於テ可及的早ヤク治癒ニ趣カシメ以テ諸種

ノ畸形ヲ止メザラシメントシテ第二期縫合術ヲ施シタル

者アリ夫レヲ行フニハ肉芽面ハ豫シメ銳起ヲ以テ抓搔シ

新創面ヲ造成シテ縫合スルニアリト余ハ切ツニ報告著其

後ノ成績ヲ聞カント欲ス

遺後症タル關節強直ハ「マツサーシー」等一般治法ニヨリ
治スベシ

切開ノ注意 横ニ切割スヘカラズ夫レ腱ヲ切ルノ患アル

ヲ以テナリ宜シク縦割スベシ指ノ兩側面ハ可成的之レヲ

避タベシ血管ノ走行セル部ナルヲ以テナリ然リド雖も時

機ニヨリテハ顧慮スルコト止メヨ即チ前述セル如クナル

ヲ以テナリ又事些細ニ似ダリト雖モ指趾ハ知覺過敏ノ部

ナルヲ以テ切開ニ臨ミ必ズ床上ニ横臥セシメテ行ヒ決シ

テ輕ロ輕ロシクシテ失神セシムルヲ勿レ

◎ 鈍器ノ作用ニ因スル内臟破裂ノ

三例(外科研究會ニ於ケル談話)

森 理 記

凡ソ外襲性損傷中鈍器ノ作用ニ因スルモノ程意外ノ損傷
ヲ來スモノハアラジ之レ恰モ硝子器ヲ護謨囊ニ盛リ而メ
之ヲ打擊スルニ外圍ナル護謨囊ニハ少損ナクシテ却テ包
中ノ硝子器破碎スルガ如ク彈力ニ富メル皮膚ニハ些微ノ

損傷ヲ住メシテ單トリ内部器臓ニノミ傷害ヲ及ボス。屢々之レアレバナリ之レ余カ小實檢ナルニモ拘ハラズ茲ニ本題ヲ掲ゲテ談話スル所以ナリ。

余ノ三例ハ腸管膜、肝臓及肝臓兼腎臓ノ破裂トス。

第一例 四十七才ノ強壯ナル男子同年輩ノ男子ト對酌半日約一升餘ヲ傾ケ醉餘口論ノ末坐位ニ於テ對手者ノ爲メ

腹部ヲ蹴踢セテレテ仆臥シ凡ソ一時許ニシテ致命セリ。

四十時間ノ后之ヲ剖驗スルニ腹部肌膚表面及ヒ筋肉組織ニ異狀ナク臍窓ノ上部ニ該當セル腹網膜ノ表面及ヒ各器

臓間ニ於テ扁平ナル厚サ半仙迷大サ鷄卵大ヨリ鷄卵大ニ至ル八個ノ凝血塊アリ腹腔ハ濃キ血様色ノ液ヲ以テ充サレ其量千九百八十瓦膜ヲ算セリ又タ胃ノ下端ヨリ百八十

内至二百拾仙迷ヲ距ツル空腸ノ管壁漿液膜下ニ於テ半錢銅貨大ヨリ一錢銅貨大ニ至ル八個ノ溢血アリ（大約臍窓

部ニ該當ス）而ノ之ニ接續セル腸間膜ニ於テ直徑五仙迷ノ不正圓形タル破綻アリ其裂縫ハ犬牙狀ヲナシ而ノ其邊

縁ヲ周匝シテ幅貳仙迷ノ黒色（溢血）ヲ呈セリ其他之ヲ中

心トシ豌豆大ヨリ蠶豆大ニ至ル數個里色斑（溢血）ヲ認ム。

損傷ニ比シテ出血ノ量多キヲ以テ大小腸ヲ胃ト共ニ細心注意シツ、腹腔外ニ探出シ腹部大動靜脈及ヒ其主ナル枝別並ニ他ノ器臓ヲ精査詳檢セルモ外襲的損傷及七病的變狀ヲ認メス。

頭腔及ヒ胸腔器臓ニハ比較的貧血狀態ヲ見ルノ他異狀ナシ。

由是觀之腹腔内ニ血様色ノ多量ヲ見ルハ其多分ハ腹腔液ノ存在ニヨルベキモ其幾分ハ血液ノ混入セルモノタルヤ論ヲ保タス且ツ幾多ノ凝血塊ヲ具ル等其致死原因ノ腹内出血ニヨルヤ推測ニ難カラズ然レニ前述ノ損傷ハミニシテ如上ノ出血ヲ來スベキヤ否疑問ニ屬スルモ他ニ損傷ヲ見出サザルヲ以テ此出血ハ腸間膜ノ破綻ニヨルモノト見微サザル可カラズ蓋シ受傷后死ヲ致スマテ約壹時間ニ亘レルト及ヒ酩酊中ナルトニヨリ腸間膜ニ於ケル細小血管ノ破綻モ此ノ如キ多大ノ出血ヲ來タセルモノナラン。

第二例 二十九才ノ屈強ナル土方業ノ男子、一日裸躰ノマ、老弱十餘名ノ圍繚セル宴席へ暴レ込ミ爲ニ衆人ノ乱撃ヲ受ケ即時致命セシモノニシテ全身肌膚ハ殆ント間隙ナク表皮剥脱ト皮下溢血トヲ以テ被ハル、カ如キ觀ヌ呈セリ然レニ皮膚斷裂ナク從テ外部ニハ些ノ出血ヲモ見セリ

剖驗スルニ(イ)肋骨ハ左右共ニ第二ヨリ第九ニ至ルマデ各肋軟骨ノ接際ヨリ外方約壹仙迷ヲ距ヅル所ニ於テ全骨折ヲ呈ス(ロ)左肺下葉外下線ニ於テ大豆大ナル黒褐色ノ全部アリ切割スルニ凝血塊ヲ含有ス(ハ)腸間膜ハ殆ント其瓦謨ノ濃キ血様色ノ液ヲ容含ス(ホ)右側腎臓ノ上外方ニ

ニ走レル二條ノ不正樹枝狀ノ破裂ヲ呈シ其内側ノモノハ拾五仙迷右側ノモノハ八仙迷ニシテ深サ各壹仙迷半ヲ算セリ

由是觀之肺臟ノ損傷ハ破折助骨片ニ抵觸セルニ由リ腹腔内漏血ハ肝臟ノ破裂ニ基ケルモノニシテ其内部所見ノ著明ナルニ係ハラズ皮膚ノ斷裂ヲ見ザルハ一ハ皮膚ノ彈力ニ富メルト一ハ比較的柔軟ナル鈍躰ヲ以テ打撲セルモノ例之拳打足踢セルニヨルモノナラン

第三例 七十一才ナル獨居ノ老嫗夜間強盜ノ襲フ所ドナリ翌朝ニ至リテ其死ヲ發見セルモノニシテ胸腹部ノ外表所見上ニ於テハ只右乳房上部ニ舉大ノ皮下氣腫ヲ觸知スルノ他異狀ヲ認メス

剖驗スルニ右胸前面第二肋骨部ヨリ斜メニ外下方第六肋骨ノ中央ニ至ル舉大ノ皮下結織織中ニ於テ氣泡ノ存在ヲ認メ同側腋窩線ニ該當セル部位ニ於テ第五ヨリ第九ニ至ル五肋骨ハ全折シ該折端ハ内方に向ヒ而ノ其周圍ニ於テ僅微ノ漿液膜下溢血ヲ呈ス然ニ右肺表面ヲ精査スルモ損シテ深サ各半仙迷ヲ算シ右葉上面ニ於テモ亦タ同ク前後

傷部ヲ検出スル與ハザリキ。

肝臓ハ其右葉外縁ノ角度ヲナセル部ヨリ内方ニ向ヒテ水平ニ且ツ銳刃器ヲ以テ切研セル如クニ斷裂シ其長サ及ヒ深サ共ニ八仙迷ヲ算ス故ニ同側ヨリ觀望スルトキハ肝右葉ハ上下二葉ヨリ形成セラレタルモノ、如シ。

又右腎ハ其腎門部ニ於テ一仙迷ノ間隔ヲ有セル二個ノ横裂創ヲ呈シ其上方ノモノハ長サニ仙迷下方ノモノハ同ク三仙迷ニシテ深サ各半仙迷ヲ呈セリ。

其他著大ナル頭蓋骨折及ヒ脳挫傷ヲ有セリ。

抄 錄

◎副腎越幾斯ノ効果アリシ二例 ニ就ア

（フルター、ヘンリー、ブラウン氏（英國））

其一例

患者ハ三十歳ノ一男子ニシテ嘗テ痔疾ノ出血ニ惱メルモノニシテ其ノ出血ハ發作時ヘ甚タ劇烈ニシテ屢々其着セル衣服ヲ浸透スルコトアリ然ルニ終ニハ其ノ淋漓タル出血不絶止マザルニ至ル。之レ病既往病狀ヲ聽クニ最早手術ヲ施行シ得ベカラザルモノ、如シ是に於テ

脳スルコト殆ント十二ヶ月間該發汗ノ甚タシキ日毎ニ衣服ヲ交換スルコト二三回ニ及ブ而シテ其ノ二十四時間ノ排尿量ハ只ニ一八〇、〇内外ニ止マルノミ是レガ

爲メニ患者ノ一年門ニ失ヘル体重ニ「ストーン」（三貫三百八十六匁餘）ニ及ブ而モ該一年間ノ加療毫モ奏効ヲ認ムルコトヲ得ズ發汗症ハ頑トシテ退カズ寧ロ益々

増悪スルノ傾向アリ。此時ニ於テ之レニ副腎越幾斯錠ヲ投與セシニ服用後二日ニシテ漸次發汗減少ヲ來シ四日ノ終リニ於テハ全ク發汗ヲ見サルニ至リ尙ホ持重シテ服用スルコト四日ニシテ尿量ハ全ク常規ニ復スルヲ得タリト。

其二例